

1 夕暮れの光を掴む

問1

答え イ

5点

拓海は、自分の描いた絵について「遠近法も正確で、陰影のつけ方も教科書通り。デッサンとしては申し分ないはず」としながらも、「どうにも退屈で生気がない」「誰かが用意した見本を丁寧になぞっただけのよう」と感じて不満を抱いています。したがって、技術的には問題がないものの自分らしさや生気がないことに悩んでいる状態を示す「イ」が正解です。

問2

答え 自分の見たい光を、わがままに表現してほしいから。

7点

美咲は夕日を見せた後、拓海に対して「もっと、自分の見たい光を、わがままに表現していいんじゃない？」と語りかけています。美咲が夕日を見せたのは、そのお行儀良くないけれど強い夕日のように、拓海にも「自分の見たい光を、わがままに表現してほしい」と考えたからです。解答は、条件の「光」を使い、字数制限（30字以上35字以内）に収まるように「自分の見たい光を、わがままに表現してほしいから。」（32字）とまとめます。

問3

答え レンガの表面を黄金色に染め上げる情景

6点

美咲の問いかけを受けた後、拓海は「赤とオレンジが激しく混ざり合い、レンガの表面を黄金色に染め上げる情景が鮮やかに浮かび上がった」とあります。ここから「どのような情景か」という問いに合う部分を抜き出します。「レンガの表面を黄金色に染め上げる情景」（20字）が、指定された字数（15字以上20字以内）にぴったりと当てはまります。また、「赤とオレンジが激しく混ざり合う情景」（18字）も正解となります。

問4

答え イ

5点

拓海が「少し分かった気がする」と言ったのを見て、美咲は「嬉しそうに微笑む」とあります。美咲は、拓海が「誰の評価も気にしないで、自分の見たい光を表現する」というアドバイスを受け入れ、前向きに描く意欲（＝「復活」）を取り戻したことを喜んでいます。したがって「イ」が適切です。

問5

答え ア

5点

この小説は、絵に行き詰まっていた拓海が、美咲との対話や、窓の外に見える夕日の情景（雲を突き破る強い光）を通して、自分らしい絵を描く一步を踏み出す過程を描いています。夕景の描写が拓海の心境変化を促す重要な役割を果たしており、これらを重ね合わせて描いた「ア」が最も適切です。

2 国語の知識

問1

答え (1) りしゅう (2) むじゅん (3) いこう (4) すみやか (5) こくふく

10点

問1は、中学3年生までに身につけておきたい常用漢字の読みの問題です。1「履修（りしゅう）」：決まった教育課程を修めること。2「矛盾（むじゅん）」：つじつまが合わないこと。3「移行（いこう）」：ある状態から他の状態へ移り変わること。4「速やか（すみやか）」：動作が素早い様子。5「克服（こくふく）」：困難に打ち勝つこと。いずれも高校入試で頻出の漢字です。

問2

答え (1) 換気 (2) 維持 (3) 背景 (4) 実施 (5) 普段

10点

問2は、同音異義語との書き分けや部首の正確さが求められる漢字の書き取り問題です。1「換気（かんき）」：「喚起」などと書き間違えないように注意しましょう。2「維持（いじ）」：「維」「持」ともに糸へん、手へんを正しく書きます。3「背景（はいけい）」：「背」の部首（にくづき）や「景」の形に注意します。4「実施（じっし）」：「施」のつくり（也）を正確に書きます。5「普段（ふだん）」：「普」の上の部分（並）を正確に書きましょう。

問3

答え ア

2点

正解は「ア」です。「青天の霹靂（せいいてんのへきれき）」は、青く晴れ渡った空に突然雷が鳴り響くことから、予期しない突発的な大事件や変動が起こることを意味します。他の選択肢の意味：イ「五里霧中（ごりむちゅう）」は、物事の様子が全くつかめず方針が立たないこと。ウ「朝三暮四（ちょうさんぼし）」は、目先の違いにこだわり、本質が同じであることに気づかないこと。エ「画竜点睛（がりょうてんせい）」は、物事を完成させるための最後の仕上げのこと。

問4

答え ア

2点

正解は「ア」です。問題文の「ない」は、動詞「間に合う」の未然形「間に合わ」に付く打消しの助動詞「ない」です（「ぬ」に置き換えることができます）。アの「ない」も動詞「できる」の未然形「でき」に付く打消しの助動詞「ない」なので、同じ働きです。イは存在しないことを表す形容詞、ウは前の語句を補助する形容詞（補助形容詞）、エは状態を否定する補助形容詞です。これらは「ぬ」に置き換えることができません。

問5

答え ウ

2点

正解は「ウ」です。自分（の側）の動作を低めて相手への敬意を表すには「謙譲語」を使います。「読む」の謙譲語は「拝読する」なので、「拝読しました」が適切です。ア・イ・エはすべて相手を高める「尊敬語」であり、自分の動作に使うのは誤りです（アは「お～になる」、イは特別な尊敬語、エは助動詞「れる」による尊敬）。

3 言葉の「すき間」と対話の役割

問1

答え ア

5点

空欄[A]の前では、個人の複雑な感情を「悲しい」という共通の不完全な言葉で代表させてしまう例が挙げられています。空欄の後ろでは、「言葉には最初からすき間が存在している」と前文の内容を要約して言い換えているため、換言（言い換え）を表す接続語の「つまり」が入るのが最も適切です。

問2

答え 対話を排除し効率性ばかりを追求すると、他者の多様なあり方を受け入れる力を失ってしまうから。（四十七字）

7点

傍線部〔2〕の直後の段落に、「なぜなら、対話という『回り道』を排除し、情報伝達の効率性ばかりを追求していくと、私たちは他者の多様なあり方をそのまま受け入れる力を失ってしまうからだ」と理由が直接書かれています。この部分を制限字数（四十字以上五十字以内）に収まるように、「対話を排除し効率性ばかりを追求すると、他者の多様なあり方を受け入れる力を失ってしまうから。」とまとめます。

問3

答え 単なる不足

5点

傍線部〔3〕の直前にある「私たちは言葉の『すき間』を、単なる不足ではなく、豊かな『言葉の余白』として捉え直す必要がある」という一文に着目します。「言葉の余白」を「どのようなもの（ではなく、豊かな言葉の余白として）」捉え直すのかを考えると、「単なる不足」ではないものとして、と捉えることができます。「単なる不足ではなく、」という部分がちょうど十字（単・な・る・不・足・で・は・な・く・、）となります。したがって、初めの五字は「単なる不足」となります。

問4

答え 言葉を使いこなしつつも、言葉では伝わらないものがあることを自覚し、相手の存在そのものに向き合う姿勢を育むこと。（五十五字）

6点

傍線部〔4〕の直後の一文「言葉という便利な道具を使いこなしつつも、言葉だけでは伝わらないものがあることを常に自覚し、言葉の向こう側にある相手の『存在』そのものに向き合う姿勢を育むこと」を整理します。要素として「言葉を使いこなしつつも」「言葉で伝わらないものがあることを自覚する」「相手の存在に向き合う姿勢を育むこと」の三点を盛り込み、五十字以上六十字以内の自然な日本語にまとめます。

問5

答え ウ

5点

アは「誤解や行き違いをすべて解消している」が本文（誤解や行き違いを恐れて会話を済ませようとするが、関係が薄っぺらになる）と矛盾します。イは「言葉は～完璧な道具」が本文（言葉は不完全な道具）と矛盾します。エは「言葉以外の手段を一切排除し」が本文（言葉に頼りすぎないコミュニケーション、回り道としての対話を大切にすると）矛盾します。ウは、第五段落の「この『すき間』は欠陥ではない」や、第十段落の「豊かな言葉の余白」などの記述と完全に一致するため、正解です。

4 古文

口語訳（全文）

木登りの名人といわれた男が、人に指図して、高い木に登らせて梢を切らせたときに、たいそう危なく見えたうちは何も言わないで、降りるときに、軒の高さくらいになって、「失敗するな。注意して降りよ。」と言葉をかけましたので、（私が）「これくらいになっては、飛び降りても降りられるだろう。どうしてこう言うのか。」と申しましたところ、（その男は）「そのことでございます。目がくらみ、枝が危ない間は、自分で恐れますので（私からは）申しません。失敗は、安全な所になって、必ずするものでございます。」と言う。そまつな身分の低い者であるが、その言葉は聖人の戒めになっている。蹴鞠も、難しい所を蹴り出した後、（これで）安心だと思ふと、必ず（鞠を）落とすと申すとかいうことだ。

問1

答え いいし

4点

歴史的仮名遣いで語頭以外の「ひ」は、現代仮名遣いでは「い」に直す。「いひし」→「いいし」となる。

問2

答え ア

4点

「あやまちすな。心して降りよ。」と声をかけたのは、人に指図して木に登らせていた「高名の木登り（木登りの名人）」である。よってア。

問3

答え 高くて危ないうちは自分で気をつけるが、安全な所まで来ると油断してしまい、かえって失敗するから。

6点

名人は、危険なうちは自分でも恐れて気をつけるが、安全な高さまで降りて『もう大丈夫だ』と油断したときにこそ失敗が起こる、と述べている。危険な場面より、気のゆるむ場面が危ないという考え方である。

問4

答え イ

4点

筆者は名人の言葉を「聖人の戒めにかなへり」と高く評価し、蹴鞠の例も挙げて、安心したときにこそ失敗するという教訓を一般化している。よってイ。アは『必ず従う』が言い過ぎ、ウは『あやしき下臆なれども（身分は低い）聖人の戒めにかなう』と逆、エは本文にない。
